



# ランナーズ財団

# NEWS

Vol.1  
2025年春夏号



公益財団法人ランナーズ財団  
公式ホームページ



## 2025ランナーズ賞 応募受付開始

2025年7月31日まで



ランナーズ賞は、市民ランニングの普及と発展に貢献してきた個人や団体、また、日々ランニングの新しい世界の発見に努めている人たちを称える賞です。受賞者には、正賞のトロフィーならびに副賞として賞金200万円を贈呈。今年も、自薦・他薦を問わない一般公募から選考を開始します。



# ランナーズ財団の表彰事業とこれからの取り組み

## 2025年「第35回ランナーズ賞」募集開始

### 市民ランナーのための

### 市民ランニング賞

「ランナーズ賞」は1988年、当時雑誌ランナーズ編集長 下条由紀子、同誌編集顧問の東京慈恵会医科大学教授 小野三嗣氏、出版元の株式会社ランナーズ社長であった橋本治朗の三氏の構想のもと創始されました。

「スポーツエリートのみを表彰するのではなく、毎日コツコツと地道な努力を続けている一般市民ランナーと市民ランニングを陰で支えている人たちに、その活動を称えること」を謳い、昨年2024年の第34回まで110の個人、団体が受賞しています。受賞者の顔ぶれは、ランニングというスポーツが年齢、性別、職業、地域を問わず広く人々と社会に受け入れられ、発展してきたスポーツであることを示しています。

今後も市民ランニングがさらに発展、拡大していくために、この賞がその一助になることを念じ、公益財団法人ランナーズ財団が主催してまいります。

### 受賞者ってどんな人？

ランニングの新しい世界の発見に努め、人々に走る喜びや幸せを提供しているランナーズ賞の対象は、あなたの周りにもいます。これまでの受賞者の方々を、次ページからご紹介します。

### 今年の「ランナーズ賞」

### 応募受付について

ランナーズ賞は、一般公募から書類選考、その後、選考委員会にて決定します。授賞式は本年12月上旬、東京都内の会場にて開催。増田明美選考委員長より、正賞のトロフィーならびに副賞として賞金200万円を贈呈します。

市民ランナーの皆様からの推薦、ご応募をお待ちしています！



## 第35回ランナーズ賞 受賞候補者 募集要項



2024年「第34回ランナーズ賞」授賞式



2024年授賞式ダイジェスト動画

### 募集期間

5月15日(木) ▶ 7月31日(木)

応募フォーム



### 選考委員

 増田明美 選考委員長	 福田六花 医学博士、 ミュージシャン	 近藤雄二 読売新聞編集委員	 谷川真理 マラソンランナー
 若林順子 フリーアナウンサー	 橋本宗明 明定会会長	 行場竹彦 月刊ランナーズ 編集長	 野平 修 (公財)ランナーズ財団 理事長

主催	公益財団法人ランナーズ財団
募集対象	ランニングの普及・発展に貢献した「人物」「団体」「大会」など
応募方法	自薦・他薦を問いません ランナーズ財団ホームページの専用フォームからご応募ください
募集期間	2025年5月15日(木)～7月31日(木)
選考方法	一般公募 → 書類選考 → 選考委員会にて最終決定
結果発表	2025年9月10日(水) ランナーズ財団ホームページにて発表
表彰	正賞:トロフィー、副賞:賞金200万円 12月に都内会場にて授賞式開催



### ランナーズ賞「部門賞」

「ランナーズ賞」では、選考対象を拡大していくにあたり、新しいカテゴリー「部門賞」の設定を検討しています。内容は今後ランナーズ財団のホームページでお知らせし2026年からスタート予定。ご注目ください！





RUNNERS AWARD

都道府県別

ランナーズ賞 1988 ▶ 2024年受賞者

※敬称略

全国組織

- 日本体力医学会持久走大会同好会
- 日本医師ジョギーズ連盟
- 日本糖尿病協会マラソンチーム (TDJ)

台湾

- 陳 傳男

ハワイ

- ホノルルマラソン

福岡

- 梶栗 清
- 福岡大学体育学部 運動生理学研究室
- 山崎常行
- 君原健二

佐賀

- 佐藤喜八・佐藤十四子
- 中富正義
- 柳川春己および伴走者

徳島

- 日比野敏行
- 徳島大学開放実践センター マラソン講座&徳島大学TJP

香川

- 竹上 進

高知

- 安芸百走会

島根

- 愛走フレンズ
- 松下耕太郎

岡山

- 貝畑和子

広島

- 広島壮年走ろう会

山口

- 小野幹夫

新潟

- 澁谷 信

石川

- 羽咋走ろう会
- 天野耕兵衛

福井

- 西島美保子

山梨

- 富士吉田市 陸上競技協会

北海道

- 木戸孝美
- 斉藤登久代
- 能渡貴美枝

岩手

- 佐藤誠之

秋田

- 山田敬蔵

福島

- いなほ陸友会
- 奥川へとへとクラブ
- 桜井勝延

茨城

- 牛久走友会
- 松田千枝
- 高田龍二
- かすみがうらマラソン 兼 国際盲人マラソン かすみがうら大会

群馬

- 鏑木 毅
- 山西哲郎

埼玉

- 山地啓司
- 小嵐正治
- 弓削田真理子

千葉

- 藤岡經子
- 折田兼隆
- 田中英文・田中千尋

東京

- 波多野 斐
- 石沢重信
- 佐々木 功
- 星野敦志
- 平野 厚
- 大島幸夫
- 藤本嘉信
- 海宝道義
- 羽生敏昭・雨宮輝也・野村隆平
- 横田昭夫
- 和田 彰・和田紀代子
- 李 正順
- 【特別賞】 皇居ランニングコース
- 日本山岳耐久レース
- アキレストラック クラブジャパン
- 鈴木邦雄
- アトミクラブ
- 会田光一
- 東京夢舞いマラソン
- 夜久 弘
- 越智利国
- 中野陽子
- 大久保淳一
- 小島靖子
- 株式会社カネカ

神奈川

- 鈴木隆子
- 杉本博敬
- 神奈川県走友会連盟
- 角田 進
- 福澤 潔
- 田中 一
- 月例マラソン
- 伊藤 明
- 坂本雄次

長野

- 松本すすき川走る会
- 関崎 豊・関崎智琉
- 伊藤和雄

岐阜

- 財津源吉
- ぎふ長良川走ろう会

静岡

- 星野芳美
- 保坂好久
- 永井 恒

愛知

- 久保田 競

京都

- 京都走ろう会
- 高石ともや
- 若林順子
- 石井好二郎

大阪

- 村本みのる
- 石井秀夫
- 馬杉次郎
- 日本横断リレーマラソン
- 阪本真理子・日本 100 マイルクラブ
- 大阪府富田林養護学校・富養走友会
- 佐藤光子
- 和田伸也
- 豊岡示朗

兵庫

- 武庫川スポーツクラブ

熊本

- 熊本走ろう会
- 八代走ろう会
- 永谷誠一
- 阿南重継

宮崎

- ゴールデンゲームズ in のべおか
- 谷口善昭

沖縄

- 比嘉貞男
- 島袋 勉
- 比嘉良雄
- 平田久雄



# RUNNERS AWARD

## ランナーズ賞過去受賞者

ランニングを通して多くの人々へ活力を与え、社会に貢献し、市民スポーツの発展を支えてきた人、団体などを表彰するランナーズ賞。1988年(昭和63年)～2024年(令和6年)までの受賞者をご紹介します。  
※敬称略

群馬

2012年受賞  
(第25回)

鏡木 毅



2009年の世界最高峰トレイルレース「UTMB(ウルトラトレイル・デュ・モンブラン)」で日本人過去最高の3位入賞。2012年、国内初の100マイルレース「UTMF(ウルトラトレイル・マウントフジ)」では実行委員長として大会を成功に導く。プロトレイルランナーとして再始動・活躍する傍ら、「トレイルランの普及を通じ地方に活力を」と各地で講習会や講演を行う。

群馬

2017年受賞  
(第30回)

山西哲郎



兵庫県出身。東京教育大学(現 筑波大学)在学中に箱根駅伝出場。その後、コーチ、拓殖大学の監督、群馬大学、立正大学などで教鞭をとり、多くの学生を指導。教え子の中からは、その後ランニングの指導者・研究者の道に進んだ人も多い。市民ランナーに向けても、月刊誌『ランナーズ』や編集主幹を務める『走る世界』で、走ることの奥深さを書き続けてきた。ランニングは個人だけにとどまらず社会を変革する力を持つと語り、「メダル数を議論するだけでなく、スポーツによって人生を豊かにするとは何か、より人間らしく生きるとは何かを考えて欲しい」と、2025年現在もランニング文化の成熟を願うメッセージを発信している。

福島

1989年受賞  
(第2回)

いなほ陸友会



1970年、斉藤一夫会長のもと、福島県東和町にて発足。青年の夢を育み、可能性の追求を目的に、さまざまな活動を実践してきた。とくに、陸友会の発足を記念して誕生した「東和ロードレース」は、町民と一体となつての親身な大会運営で知られる。

北海道

2007年受賞  
(第20回)

木戸孝美



1941年生まれ。'93年設立の「ウルトラランナーズクラブ」会長。会員全員がサロマ湖100kmウルトラマラソンの完走を目標に掲げ、2007年時点で103人がサロマを完走した。自身も完走回数19回。「完走請負人」としてサロマの名物ランナーともいえる存在。

福島

2008年受賞  
(第21回)

奥川へとへとクラブ



1974年結成。'76年に「第1回奥川健康マラソン」開催以来、33年(受賞年当時)にわたり運営をサポートしてきた。同イベントには奥川地区住民もスタッフとして総参加し、1年のうち最も賑わう行事へと成長。過疎化が進むエリアでの地域活性化に大きく寄与してきた。

北海道

2008年受賞  
(第21回)

斉藤登久代



サロマ湖100kmウルトラマラソンで、1987年第2回大会から「愛のエイドステーション」と呼ばれる私設エイドを運営。普段はランニングに無縁の生活を送るが、自宅前のコースを走るランナーたちを応援したい思いで始めた。パン、漬物、冷たいタオルと温かいタオル、消炎剤、胃薬など、オフィシャルエイド以上の充実ぶり。68km地点にあるこのエイドに「救われた」と語る完走者は多い。

福島

2012年受賞  
(第25回)

桜井勝延



2012年当時、福島県南相馬市市長。市長一期目に東日本大震災が発生。震災2カ月後に日課だった8kmの早朝ランを再開し、走ることで培った気力と体力で市長として復興を牽引。南相馬市民や全国の市民ランナーにランニングの持つ力を再認識させ、大きな勇気を与えた。

北海道

2011年受賞  
(第24回)

能渡貴美枝



40歳で走り始め、41歳でフルマラソン初完走。翌1994年にチャレンジ富士五湖(117km)で女子の部優勝。以降、さくら道国際ネイチャーラン(250km)やスパルタスロン(ギリシャ・246km)優勝をはじめ、国内外のウルトラマラソン大会で輝かしい実績を残す。

埼玉

2014年受賞  
(第27回)

山地啓司



1942年生まれ。運動生理学者。東京大学大学院で研究を開始し、論文のみならず『ランニング事典』『マラソンの科学』(PH選書)など多くの書籍を執筆。セミナーや講演活動にて、「最大酸素摂取量」「心拍数」といった言葉とその意味を市民ランナーに広めた。1990年には「ランニング学会」を設立。初代会長を務め、研究者や科学的知識を有するコーチの裾野を広げた。

茨城

1997年受賞  
(第10回)

牛久走友会



1979年発足。積極的なボランティア活動で知られ、地元の「牛久シティマラソン」には毎年、会をあげてコース案の検討・運営協力として参加している。その活動は幅広く、地域のスポーツや社会福祉に貢献したとして、'87年には茨城県知事より表彰を受けた。

岩手

2005年受賞  
(第18回)

佐藤誠之



1934年生まれ。22年間連続(受賞年時点)無休走を続け、「走りに勝る業なし」を体現するドクター。'81年に走友会「花泉らんらん」を創設。'83年には萩原隆氏(第8回ランナーズ賞受賞)らと「日医ジョーガーズ連盟」を結成し、東北ブロックの会長を務めた。

茨城

2004年受賞  
(第17回)

松田千枝



1948年静岡県生まれ。'66年に資生堂静岡販売会社へ入社し、'71年より本社勤務。結婚、出産を経て、27歳の時に夫の勧めでランニングを始め、'79年に初開催された東京国際女子マラソンに出場、60歳になる2008年まで参加を続けた。40代後半からはタイムを狙うこと以上に「内面からの喜びが溢れる走りを実現したい」と、見る人に走る姿や走ることへの姿勢を感じてもらう「歓走」を自身の目標としてきた。「女子マラソンのパイオニア」であると同時に、ハワイ島で行われたインターナショナルトライアスロン(アイアンマントライアスロン)にも挑戦し、完走。アイアンマンの称号を得た日本の女性第1号となった。

秋田

1990年受賞  
(第3回)

山田敬蔵



1927年秋田県生まれ。1952年、戦後の日本が初参加となったヘルシンキオリンピックにマラソン日本代表として出場。'53年、ボストンマラソンで優勝。同大会には年齢60代後半となった'95年からも毎年出場しており、'98年～2001年は70歳以上の部を4連覇した。また、優勝年の1953年にちなみ、ゼッケン1953は永久欠番。出場時には本人のみがこの番号を付けることを許されている。国内でも長年ランニングを続け、10kmレースからフルマラソンまで、毎年およそ40大会に参加。故障や病気に無縁で、晩年まで各地のマラソン大会でその健脚を披露していた。

埼玉

2015年受賞  
(第28回)

小嵐正治



2008年から10年間、NPO日本医師ジョーガーズ連盟代表理事を務め、マラソン大会でのドクターランナー活躍の場を創出。年間10大会以上のフルマラソン、ウルトラマラソンに出場し、ランニングを知る整形外科医として、市民ランナーへのアドバイスや著述でも活躍。

埼玉

2023年受賞  
(第33回)

弓削田真理子



埼玉県立川越女子高校教諭。24歳で初マラソンを走り、58歳の時に初サブスリーを達成。61歳、下関海響マラソンで2時間59分15秒をマークし、マラソン完走者の上位約3%にあたるサブスリーを60代女性として世界で初めて達成した。自己ベストは62歳で出した2時間52分13秒、60～64歳女子世界記録。2025年現在も陸上部顧問として、生徒たちと練習している。

茨城

2006年受賞  
(第19回)

高田龍二



ディレクターを務める鶴沼ウルトラマラソンは、スパルタスロン優勝者からビギナーまで、幅広いランナーを受け入れる名物大会として2006年に開催50回を数えた。行政の力を借りず、全て手作りで運営。24時間走では日本代表チームの一員として世界大会にも出場。

千葉

2004年受賞  
(第17回)

藤岡経子



1931年生まれ。助産師、看護師、鍼灸マッサージ師の資格を持ち、'70年に市川市体育指導委員に。「健康づくり教室」の指導やスポーツイベントの企画立案など34年間にわたって活躍。フルマラソン出場を続け、地域の人たちに生涯スポーツの楽しさを自ら実践して伝えた。

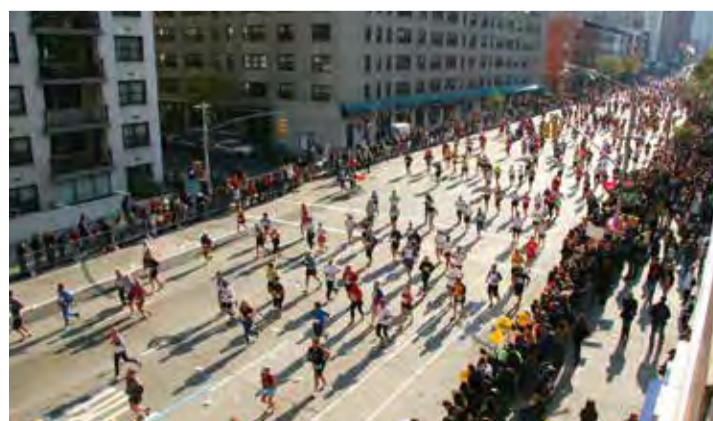
茨城

2012年受賞  
(第25回)

かすみがうらマラソン 兼 国際盲人マラソンかすみがうら大会



1995年第5回大会で盲人マラソンの部を設けると、国際視覚障害者スポーツ協会から高評価を得て、公認の国際盲人大会として併催された。車いすマラソンの実施やエントリー料の一部を霞ヶ浦の水質浄化啓発運動基金に寄付するなど、福祉や環境に向き合う大会づくりを行う。



**東京**  
2010年受賞  
(第23回)

**アキレストラッククラブジャパン**

ニューヨークに本部を置く国際走友会の日本支部。障害と共に生きるランナーとサポート健常ランナーが「協走」の絆で結ばれ、心響きあう「響走」の歓びを分かち合うことをビジョンとしている。メンバー間に垣根はなく、障害の種類や程度を問わず、海外のランナーとも交流。

**東京**  
2011年受賞  
(第24回)

**鈴木邦雄**

1984年、日本盲人マラソン協会の練習会を機に、伴走の道へ。盲人ランナーにとって鈴木さんの伴走は「ひとりで走っている錯覚に陥るほど」の安心感があり、「伴走の神様」と称されることも。自らのノウハウを記した『伴走（歩）ガイド』を基に、伴走教室も開催。

**東京**  
2012年受賞  
(第25回)

**アトミクラブ**

1984年に10名で立ち上げられ、篠原義雄代表、関田善作さんらを中心に、代々木公園での週1回の練習を無償で運営。活動29年目となる2012年当時の会員数は450名。年齢20代～70代まで、フルマラソンの記録は2時間20分台～4時間台までと実に幅広い。

**東京**  
2012年受賞  
(第25回)

**会田光一**

東久留米走友会の会長。45歳でフルマラソンを初完走。ホノルルマラソンは25回完走し、68歳でマウイマラソン年代別優勝を果たす。77歳で胃がんが見つかり胃を全摘出するも、2年後にはフル復活を果たし、80歳でサロマ湖ウルトラマラソン50kmを完走した。

**東京**  
2013年受賞  
(第26回)

**東京夢舞いマラソン**

初開催は2001年1月1日。「欧米にある大都市フルマラソンが日本にはない」と市民ランナー有志が立ち上げ、77人が参加、お台場スタートで代々木公園にゴールした。第3回以降は参加者が1000人を越えた。'07年東京マラソン開催で当初の目的は達成されたが、「夢舞いファン」からの後押しも受け、その後も継続。コースを毎年変え、その時々注目のスポットを盛り込んでいる。

**東京**  
2014年受賞  
(第27回)

**夜久 弘**

39歳の初フルマラソンから13年かけてサブスリー、サロマ湖100kmでは2004年にサロマンブルーを達成。市民ランナーの取材、富士登山競走やウルトラマラソンの実走レポートなど、ランニングライターとして活躍してきた。ランナーとしての自身の内面や、周囲のランナーとの人間模様を投影し、「市民ランニングには、結果だけでなくプロセスから人生のドラマがある。楽しみ方の多様性がある」というメッセージを一貫して発信。文章の力で市民ランニングの魅力を伝えた立役者である。

**東京**  
2015年受賞  
(第28回)

**越智利国**

22歳の時にウルトラマラソンの先駆けの大会である第1回「サロマ湖100kmウルトラマラソン」に最年少で出場。2015年当時、51歳で30年間連続完走を果たす。「50歳からは筋トレ」を提唱し、マシンを使ったトレーニングを推奨。健康運動指導士、トレーナーとして市民ランナーを指導する傍ら、自らの経験も交えウルトラマラソン完走のアドバイスも行う。



**東京**  
2001年受賞  
(第14回)

**海宝道義**

1943年生まれ。33歳のとき、病気克服のため走り出す。サロマ湖100kmでウルトラマラソンの魅力を知り、'94、'95年には64日間で4700kmを走るトランスアメリカフットレース完走。「海宝ロードランニング」代表として、国内外のウルトラマラソンの運営に取り組んだ。

**東京**  
2001年受賞  
(第14回)

**羽生敏昭・雨宮輝也・野村隆平**

1966年夏、東京学芸大学4年生だった3人が、「連日長距離走」をテーマに論文資料を集める目的で、マラソンの丘からバリの凱旋門までの3000kmを61日間で走破。卒業後も、ランナー、研究者、教育者として、3人それぞれがランニングに関わり続けた。

**東京**  
2003年受賞  
(第16回)

**横田昭夫**

1935年生まれ。健康維持を目的に走り始め、'75年に「高島平走友会」を設立。2000年には知的障害者を対象としたランニングクラブ「SCエンドレス」を創設。引きこもりがちな子どもたちに走る楽しさと集団生活の基本を教え、一般社会へ溶け込めるよう指導を続ける。

**東京**  
2004年受賞  
(第17回)

**和田 彰・和田紀代子**

彰さんは1934年生まれ。40代後半で失明してから走り始め、マッサージ師として勤務の傍ら全国のマラソン大会に参加。彰さんを伴走するために100m、300mとこつこつ練習を重ねた6歳年下の紀代子さんと、2003年、夫婦で47都道府県のレースを制覇した。

**東京**  
2006年受賞  
(第19回)

**李 正順**

新宿歌舞伎町に店を構えて31年（受賞当時）、スナック「ノーラン」のオーナーママ。東京国際女子マラソンなどエリート大会から市民マラソン大会まで多数の大会に出場。東京代表として海外の大会へも派遣された。2006年春、初期の膀胱がんが発覚するも手術2日後から歩き始め、その後は10階ある階段でリハビリ。5カ月を経てランニング再開。仲間と共に月1回の「ノーランズ」練習会を楽しむ。

**東京**  
2007年受賞  
(第20回)

**【特別賞】  
皇居ランニングコース**

皇居を1周する歩道に市民ランナーの姿が見られるようになったのは、1970年代半ば。ここは走るのに最適なコース。距離が5km、途中信号がひとつもない上に、適度なアップダウンがあり、すれ違えるだけの道幅もある。複数の地下鉄の駅からほど近く、1周の途中に公園も2つ。目を皇居内堀に転ずれば、緑豊かでお堀に水鳥も見える。ランナーたちの「お助け場所」としては、まわりに銭湯や通称「ランステ」と呼ばれるシャワー施設が点在する。荷物の預かり、シューズやウエアの貸し出しのほか、ランナーの聖地ともいえる皇居で快適にランニングを楽しむための情報発信とコンテンツづくりを行っている。

**東京**  
2008年受賞  
(第21回)

**日本山岳耐久レース**

1993年初開催、奥多摩主要峰を縦走する71.5kmのトレイルレース。世界的クライマーの名を冠した「ハセツネ」の愛称で親しまれ、トップ競技者から初心者まで多くのランナーに門戸を開いて、トレイルランニングの裾野の拡大と競技力の向上に大きく貢献してきた。

**千葉**  
2006年受賞  
(第19回)

**折田兼隆**

同世代で同じ自衛官である円谷幸吉選手を見て走り始め、勤務地の佐渡島を朝晩10km走るのが日課に。64歳で、お世話になった方々の役に立ちたいと僧侶となった。毎日のランニングは欠かさず、2006年当時フルマラソンを324回完走。うち196回はサブスリー。

**千葉**  
2017年受賞  
(第30回)

**田中英文・田中千尋**

英文さんは40歳より走り始め、50歳のときにサブスリーを達成。58歳で走り始めた千尋さんは、63歳でサブフォーとなり年代別1位入賞も。2017年11月時点で千尋さんが104回、英文さんが147回、2人合わせて251回のフルマラソンを完走している。

**東京**  
1990年受賞  
(第3回)

**波多野 斐**

1907年生まれ。'64年東京五輪のマラソンを沿道で観戦、アベベに感銘を受けて走り始める。'73年イギリス、'74年フランス、'75年に日本で開かれた世界ベテランズ大会に出場。フルマラソンの自己最高記録は5時間4分5秒。「皇居ランナー」のはしりの一人。

**東京**  
1992年受賞  
(第5回)

**石沢重信**

1908年生まれ。長年、東京・千駄ヶ谷で牛乳販売店を営み、早朝、自転車での配達を続けてきた。神宮外苑でランニングし、'73年、愛好者に呼びかけ「東京OB同好会」を結成。中高年齢者対象の「全国OB駅伝」を開催すると、チーム数を制限するほどの人気となった。

**東京**  
1994年受賞  
(第7回)

**佐々木 功**

1943年生まれ。学生時代に箱根駅伝を4度走り、実業団（NECホームエレクトロニクス）の監督になってからは国際的ランナーを育成、浅井えり子をソウル五輪女子マラソン代表に導いた。また、その指導の中心であったLSD（ロングスローディスタンス）理論をわかりやすく説いた'84年の著書『ゆっくり走れば速くなる』（ランナーズ社刊）は、市民ランナーの格好の教本となり、どれほど多くの方が安全にランニングの世界に足を踏み入れ、豊かな走る喜びを獲得していったか計り知れない。'94年8月にがん告知を受け闘病生活を続けていたが、'95年3月、惜しまれながら逝去。享年52歳。

**東京**  
1995年受賞  
(第8回)

**星野敦志**

1926年生まれ。読売新聞社にて陸上競技を担当。'64年の東京五輪後、連載『ライフ・タイム・スポーツ』で市民健康スポーツの大切さを唱え、ジョギングブームの端緒ともなる。日本陸連報道委員を務め、'91年の世界陸上ではプレステーフ、受賞年時は国際陸連報道委員。

**東京**  
1998年受賞  
(第11回)

**平野 厚**

1940年東京生まれ。'74年国立競技場ジョギング教室開設以来の講師を務めるなど、初心者・市民ランナー指導の先駆者。月刊誌「ランナーズ」でも創刊時から次々と連載を担当し、全国の読者に向けての指導を続けた。ランニング指導の著書も多数。

**東京**  
1999年受賞  
(第12回)

**大島幸夫**

1937年東京生まれ。走るジャーナリストとして毎日新聞社勤務時代から、市民ランニングを巡る状況を精力的に取材・執筆する。一方で、国際的な障害者・市民ボランティア組織「アキレストラッククラブ・ジャパン」などにおいて、運営委員やボランティア活動も続けた。

**東京**  
2000年受賞  
(第13回)

**藤本嘉信**

1934年生まれ。東京の私立保善高校にて教鞭をとり、陸上部で顧問を務める。生徒と一緒に走る熱心な指導で、無名に等しかった同校陸上部を任期中に全国高校駅伝出場15回、同入賞5回の強豪校に育てた。長年、手作りで発行した部報「保善陸上」が生徒たちの結束を強くする一助に。



岐阜

ぎふ長良川走ろう会

2003年受賞  
(第16回)



岐阜市元旦マラソン大会の参加者に呼びかけて、1978年に設立された。定例トレーニングのほか、主催する大会の運営や、各種のランニング大会に競技役員を派遣して運営をサポート。チャリティ活動など、ランニングを通じて地域社会への貢献も積極的に行っている。

静岡

星野芳美

2007年受賞  
(第20回)



子供3人を育て地元婦人会やPTA活動にも積極的に参加するママさんランナーながら、フルマラソンベスト2時間35分58秒、大田原マラソン6連覇、富士登山競走4連覇(通算5勝)、ほか大会優勝多数。実業団選手をも凌ぐ成績を残し「最強の市民ランナー」と呼ばれた。

静岡

保坂好久

2017年受賞  
(第30回)



フルマラソンの自己ベストは45歳の時に出した2時間25分28秒(1990年びわ湖)。59～61歳の年齢別世界記録を保持し、受賞年当時の68歳でも2時間58分6秒をマーク。下り坂を全力で駆ける1kmのインターバル走を、30年以上練習に取り入れている。

静岡

永井 恒

2024年受賞  
(第34回)



1956年生まれ、先天性聴覚障害がある。ろう学校中等部の頃から走り始め、5000mからフルマラソン、トレイル、ウルトラ、海外レースと長年にわたり大会参加を続ける。「2023全日本マラソンランキング」では68歳14位、3時間22分36秒(大阪マラソン)。

愛知

久保田 競

1995年受賞  
(第8回)



1932年生まれ。京都大学霊長類研究所所長を務め、脳の研究に従事した大脳生理学の大家。47歳で始めたランニングの経験を生かし、ランニングが脳に与える影響を著書『ランニングと脳』(朝倉出版)で分かりやすく説いた。大脳生理学の視点から走る魅力を伝えたこの一冊は、世界でも類を見ない。特にランナーズ・ハイ(ランニング中の陶醉状態)についての考察は画期的なものとして注目された。



京都

京都走ろう会

1990年受賞  
(第3回)



1973年発足。入会資格は、京都在住・在学・在職の小学生以上であることのみ。そのため、多様なランニング愛好者の集まりとなった。月2回の例会のほか、大文字山でのオープンなランニング大会、視覚障害ランナーの伴走などのボランティア活動も行う。

京都

高石ともや

2000年受賞  
(第13回)



1941年北海道生まれ。'62年にシンガーソングライターとしてデビュー。30歳でカリフォルニアに渡り、ジョギングと出会う。'77年夏、ランニングと音楽を一緒にしたジョギングコンサート開催など、ユニークな活動を送るグループ「ザ・ナターシャーズ」を率いて『孤独のマラソンランナー』と題したレコードを発売。同年、ホノルルマラソン初参加。その後、連続43回出場。'89年ウエストフィールドラン1011km(豪)、トランスアメリカ・フットレース4754kmのほか、国内のウルトラマラソンやトライアスロンでも活躍した。歌と笑顔と走ることで、多くの人をランニングの世界に誘い続けた功績が輝く。

神奈川

月例マラソン

2017年受賞  
(第30回)



1976年2月、「いつでも どこでも だれもがスポーツを」の理念のもと、新日本スポーツ連盟により川崎市で初開催。全国で毎月開催され、当日受付の上、基本1000円で何種目でも走り放題。3km、5km、10kmと連続して走るランナーも多く、絶好の練習機会になっている。

神奈川

坂本雄次

2023年受賞  
(第33回)



30歳から走り始め、45歳でランナーズウェルネスを起業。開催地の特色を盛り込んだウルトラマラソンのほか、地元・神奈川で湘南国際マラソンを創設した。間寛平さんのスパルタスロンやアースマラソンのサポート、24時間テレビに出演するランナーへの指導でも知られる。

新潟

澁谷 信

2010年受賞  
(第23回)



69歳で退くまで営業職。「お客様の顔を見たら、まず明るくニコリ笑おう」がモットーで、そのためにも1985年から走り始めた。家族に支えられ、新潟の豪雪の中も長靴で走った。練習を記した手製の日記は、東京学芸大学での市民ランナーを研究する資料にもなっている。

石川

はくい 羽咋走ろう会

1992年受賞  
(第5回)



1975年、40代50代のジョガーにより発足。マイペースで健康に留意して走ることをモットーに、広く市民に門戸を開く。42時間マラソン、100日健康マラソンなど、会員はもとより、走らない人を巻き込むイベントを開催し、地元のランニング振興に貢献してきた。

石川

天野耕兵衛

2000年受賞  
(第13回)



1920年金沢市生まれ。50歳の時に教師から教育委員会転勤を機にランニング開始。走る爽快感、楽しさを伝えるため、'75年金沢中央走ろう会創設、さらに数多くのランニングクラブを開設していった。「毎日食べる、毎日寝るのに、なぜ運動を毎日やらないのか」が持論。

福井

西島美保子

2019年受賞  
(第32回)



先天性の網膜疾患により弱視。学生時代は運動未経験、40歳を過ぎてから走り出した。2016年リオデジャネイロパラリンピックに出場。全日本マラソンランキングでは2019年当時3年連続1位を獲得。フル自己ベスト3時間11分33秒(2003年大阪国際女子)。

山梨

富士吉田市陸上競技協会

2024年受賞  
(第34回)



1967年発足。1970年代から富士登山競走や河口湖マラソンの運営に携わり、'81年8月には火祭りロードレースを主催。ウルトラマラソンや24時間リレーマラソンなどのランニング大会以外にも、自転車大会の主管を担い、幅広い活動を続けている。

長野

松本すすき川走る会

1991年受賞  
(第4回)



松本市を流れるすすき川をホームコースとしていた5人のランナーにより、1973年発足。市に要望し、ランニングコースもできた。元旦マラソン、お盆駅伝など会員による大会は、県内外から参加者を集め、各地で走友会や大会が分家として誕生、模範となっている。

長野

関崎 豊・関崎智琉

2015年受賞  
(第28回)



発達障害がある息子に体力と自信を持たせ、また一緒に走ることで親子の時間を持とうと、父親の豊さんが、小学校2年生になった息子の智琉さんとランニングを開始。以降7年間(受賞時)で120大会を完走した。ふたりの挑戦は、似た境遇の人たちに勇気を与えている。

岐阜

財津源吉

1988年受賞  
(第1回)



1896年生まれ。77歳から始めた散歩がやがてランニングになり、参加・完走した大会の数は300以上。85歳のときにはホノルルマラソンにも参加した。健康を維持して走ることを続け、すべての自己記録を克明に残す市民ランナーの手本のような姿勢が評価された。

東京

中野陽子

2016年受賞  
(第29回)



70歳で走り始めて、「基礎がなにより大事」とランニングスクールのメニューで練習を積み、初マラソン4時間44分44秒。その2年後にサブフォーを3時間56分46秒で達成した。87歳の現在(受賞年時点)は、マラソン女子80歳以上の世界記録を持つ。

東京

大久保淳一

2018年受賞  
(第31回)



42歳で生存率20%のがんを告げられるも、100km完走を闘病のゴールと決めて気力をつなぎとめる。命の危機を脱し、2013年にサロマ湖100kmに出場。12時間39分40秒で完走を果たし、2018年には10回目の完走、サロマブルーメンバーに加わった。

東京

株式会社カネカ

2019年受賞  
(第32回)



創立1949年、様々な化学製品を製造販売する化学メーカー。協賛している北海道マラソンには多くの社員が出場、2013年に始めたカネカグループ駅伝には社員3000人が参加。大会エントリー費やグループ駅伝に出場する社員の交通費、旅費は、会社が補助をしている。

東京・長野・神奈川

小島靖子・伊藤和雄・伊藤 明

2018年受賞  
(第31回)



2017年度の全日本マラソンランキングで、長女・小島靖子さん3位、長男・伊藤和雄さん9位、次男・明さん7位と姉弟全員がトップ10入りを果たした。走り始めたのは全員、50歳を過ぎてから。東京・長野・神奈川に離れて暮らす、年1回は同じレースに出走する。

神奈川

鈴木隆子

1991年受賞  
(第4回)



1941年生まれ。出産後の減量と健康のために始めたジョギングから、各地のウルトラマラソンを走るまでに。サロマ湖100kmを4連覇し、ウルトラマラソンの女王の異名をとる。東京・大阪の国際女子マラソンなどにも出場する実力派だが、モットーは楽しんで走ること。

神奈川

杉本博敬

1993年受賞  
(第6回)



1918年生まれ。46歳のとき、網脈絡膜疾患のため失明。運動不足、栄養過多などから糖尿病に悩まされるが、60歳でランニングを始める。盲人にとっての走る効用を体感し、「マラソンにより盲人が豊かな生活を送れること」を目的とする日本盲人マラソン協会を設立。

神奈川

神奈川県走友会連盟

1995年受賞  
(第8回)



1980年4月、走友会が県単位で結束し設立。以来、神奈川県内で多くの大会やジョギングセミナー、救急講習会などを開催。県内のランニングの発展、普及に大きく影響を与えた。当連盟が主催する大会では公的な助成金なし。参加費と協力企業からの援助で運営しているのも特徴。

神奈川

角田 進

1996年受賞  
(第9回)



1948年生まれ。慶応義塾大学時代に箱根駅伝5区を走る。社会人となってからも福岡国際マラソンで18回連続出場を果たすなど、市民ランナーの目標であり励みとなる存在で、自身もその経験をランニング教室や講演を通じて還元。慶大の競走部コーチや駅伝監督も務めた。

神奈川

福澤 潔

2002年受賞  
(第15回)



1955年生まれ。福岡国際10回連続出場などの実績を残す一方で、'88年より「ミズノランニングクラブ(旧クラブランバード)」に参加、'91年より同監督に就任。大会でのペースアドバイザーやマラソン教室、練習会など、市民ランナーのための様々な活動に貢献。

神奈川

田中 一

2005年受賞  
(第18回)



1913年生まれ。65歳で3kmを目標に走り始め、72歳で河口湖マラソンに挑戦。5時間が切れず悔しい思いをし、翌年の同大会での4時間45分が自己ベスト。以降、80歳までに海外も含め10大会のフルを完走、90歳を過ぎてもレースに参加。横浜中央走友会所属。

**山口**  
1994年受賞 (第7回)  
**小野幹夫**  
1929年生まれ。「山口100萩往還マラニック」を主催し、自治体、警察署、ボランティアの手配などをほぼ一人で担う。250km (受賞年時) は国内最長級のウルトラマソンだが、「マラニック」にこだわり、参加者が話をしながら楽しく走れる大会をめざした。

**徳島**  
1993年受賞 (第6回)  
**日比野敏行**  
1938年生まれ。日比野病院院長。47歳のとき、運動不足解消にジョギングを始める。月間150～200kmを走り、身体の変化をデータ化して、ランニングが血圧や動脈硬化などによる効果があることを実証。ランニング学会、臨床スポーツ医学会などで発表している。

**徳島**  
2011年受賞 (第24回)  
**徳島大学開放実践センターマラソン講座&徳島大学TJP**  
多くの人に運動を楽しんでもらいたいと、2002年に開設されたマラソン講座。週に1度の座学と実技を行い、2年かけてホノルルマソン完走をめざす。とくしまマラソンの運営に参画する徳島大学TJPは、ランニング研究と実践の場をつなげる仕組みで地域貢献を行う。

**香川**  
1999年受賞 (第12回)  
**竹上 進**  
1926年生まれ。「走即健康&幸福」をモットーに、地元走友会や小豆島大会のボランティア活動のほか、国内外の大会にも積極的に参加。会長を務めた「内海町健康マラソン連盟」は'97年に香川県教育文化功労団体表彰、'99年には文部大臣賞を受賞した。

**高知**  
1996年受賞 (第9回)  
**あき 安芸百走会**  
高知県安芸市にて1976年発足。会の名の「百走」には「百歳まで走ろう」との意味が込められている。会とともに歴史を刻む「安芸タートルマラソン全国大会」は、ゆっくりマイペースで走ることを趣旨とする。'83年には社会体育優良団体として、文部大臣表彰を受けた。

**福岡**  
1991年受賞 (第4回)  
**梶栗 清**  
1910年生まれ。みんなが健康でいられるのが一番、と'73年「福岡走ろう会」を結成。'75年には、同会で「志賀島老壮年マラソン」を主催した。日々のランニングやウォーキングを楽しみながら、地域の老人会を訪れ、健康であり続けるための秘訣を熱く伝えた。

**福岡**  
1992年受賞 (第5回)  
**福岡大学体育学部運動生理学研究室**  
1969年の開設以来、健康づくりのための運動処方研究を行う。70年代、効果的なトレーニング強度の定説であった「最大酸素摂取量の70%」を覆す「ニコニコペース (最大酸素摂取量の50%)」の効用を広く知らしめ、エアロビクス運動ブームの理論的背景となった。

**福岡**  
2018年受賞 (第31回)  
**山崎常行**  
1940年生まれ。九州大学名誉教授、専門は「分子集団遺伝学」。46歳より走り始め、2018年当時「フルマソンランキンング年齢別1位」を13回達成した。富士登山競走は59～66歳で7回、サロマ湖100kmウルトラマソンは52～73歳の間に計15回完走。

**福岡**  
2019年受賞 (第32回)  
**君原健二**  
1941年福岡県生まれ。オリンピックの男子マラソンに、'64年東京 (8位)、'68年メキシコシティ (銀メダル)、'72年ミュンヘン (5位) の3大会連続出場。'66年ボストンマラソン優勝。ベスト記録は'69年のアテネ国際マラソンで出した2時間13分25秒。'73年に競技の第一線を退いたが、引退後も市民ランナーとして年に数回はフルマソンへの出場を続け、走ったフルマソンは通算74大会となる。レースで棄権したことは一度もなく、74度目の完走は「優勝者が50年後に招待される」ボストンマラソンの2016年大会、75歳の時。4時間53分14秒のゴールタイムで無事完走を果たした。

**大阪**  
2009年受賞 (第22回)  
**佐藤光子**  
1962年生まれ。大阪教育大学で呼吸循環器分野を研究し、心拍の専門家としてランニング指導を行っている。ランニング学会の要職も歴任。フルマソン2時間47分53秒、100kmウルトラ8時間8分18秒、ハセツネ上位入賞の記録を持つママさんランナーでもある。

**大阪**  
2016年受賞 (第29回)  
**和田伸也**  
大学3年生の時に網膜色素変性症で視力を失う。2006年から走り始め、翌年の福知山マラソンを3時間7分で完走。その後、日本代表として、2012年ロンドンパラリンピックで全盲クラス5000m銅メダル、リオデジャネイロパラリンピックでも3種目に入賞した。

**大阪**  
2024年受賞 (第34回)  
**豊岡示朗**  
1946年生まれ、新潟県出身。東京教育大学 (現 筑波大学) 在学中、箱根駅伝に2度出場。'71年より大阪体育大学で教鞭をとり、運動生理学・運動処方研究と、陸上競技部中長距離ブロックの指導を44年間担う。市民ランナーの指導も行い、12分間走テストによるフルマソン記録の推定やトレーニング強度設定の考案など、研究と実践の内容がランナーの間で広く受け入れられた。

**兵庫**  
2000年受賞 (第13回)  
**武庫川スポーツクラブ**  
武庫川を走る仲間が自然発生的に集まり、1982年に発足。大会が少なかった頃に開催した武庫川ロード記録会、武庫川ユリカモメ70kmマラソンなどは、2025年現在でも継続している。メンバー以外にも幅広く参加者を募るオープンな走友会として活動が続けている。

**島根**  
2002年受賞 (第15回)  
**愛走フレンズ**  
1992年に発足したボランティア伴走組織。現在 (受賞年当時) の会員数は92人。走力によって「主伴走」「補助伴走」「ガイドヘルパー」と役割分担があり、地元の出雲くにびきマラソンに参加する視覚障害者ランナーをサポートする。事務局は出雲市役所スポーツ振興課。

**島根**  
2017年受賞 (第30回)  
**松下耕太郎**  
隠岐の島ウルトラマソンに第2回大会から連続出場し、隠岐の島の深刻な医師不足を認識。2010年、50歳を迎える節目の年に前任者が隠岐を去ることを知り、赴任を決意する。高齢化が進む島で、医療活動はもちろん、自身が走ることを通じて運動習慣を啓蒙している。

**岡山**  
2002年受賞 (第15回)  
**貝畑和子**  
1953年生まれ、新潟県出身。幼い頃から身体が弱く、健康のため30歳から走り始める。急速に力をつけ、大阪国際女子マラソンに連続参加。サロマ湖100kmやスパルタスロンなどにも出場、好成績を残す。'97年と'98年、IAU100km世界大会の日本代表。

**広島**  
1993年受賞 (第6回)  
**広島壮年走ろう会**  
1970年、14人の壮年ランナーにより発足。中国エリアでは最も長い歴史をもつ走友会である。毎年11月下旬の主催大会「宮島クロスカントリー全国大会」は、会員によるボランティア運営に定評があり、県内外から多くの参加者を集める。



**京都**  
2013年受賞 (第26回)  
**若林順子**  
市民ランナーを応援する番組「Let's Run!」を立ち上げ、「走るラジオパーソナリティ」として「若ちゃん」の愛称で親しまれる。精力的に現場へ出かけ関西のランニング情報を発信し続けているほか、京都御所での「わかちゃん練習会」(通称「わか練」) を主宰している。

**京都**  
2023年受賞 (第33回)  
**石井好二郎**  
同志社大学スポーツ健康科学部教授。運動処方を専門とし、走ることの健康効果を科学的見地から研究。自身は大学時代に故障で陸上競技を断念、市民ランナーに誘われ再び走り出した経験を持つ。多様な研究テーマに取り組み、日本陸連科学委員としてエリート選手にも関わる。

**大阪**  
1989年受賞 (第2回)  
**村本みのる**  
1941年生まれ。36歳で走り始め、東京国際女子マラソン、大阪国際女子マラソンに第1回大会から出場。第1回東京国際女子では日本人選手トップの7位に入り、唯一のベスト10入り。若い競技者と互角に走り、多くの市民ランナー、ことに女性に勇気と走るきっかけを与えた。2000年代以降もマスターズ陸上競技会に出場し、60歳～、65歳～、70歳～の部の長距離種目の日本記録を持っていた。

**大阪**  
1998年受賞 (第11回)  
**石井秀夫**  
1925年大阪生まれ。競技選手として21歳から走り始め活躍した一方で、健康ジョギングがまだ理解されていない当時、生涯スポーツ、走ることの底辺を広げる必要性を感じ、大阪むかし青年走ろう会、大阪走ろう会などを創設。市民ランナーの指導にもあたった。

**大阪**  
2000年受賞 (第13回)  
**馬杉次郎**  
1910年生まれ。定年後に走る魅力を知り、高齢者ランナーの全国組織である全国健康マラソン会に入会、活躍。「健康は自らの足で鍛えよう」と大阪リバーサイドマラソンを創設した。『医食同源』の規則正しい生活習慣を続け、90歳を過ぎて大会にも出場。

**大阪**  
2001年受賞 (第14回)  
**日本横断リレーマラソン**  
府立長吉高校教職員を中心とし、「走る」ことによるボランティア活動を行う。1998年8月、「ネバールに学校を作る」目的で、和歌山県潮岬と京都府経ヶ岬までの約500kmをタスキでつなぐ「日本横断リレーマラソン」を実施した。このとき集まった有志は400人以上。

**大阪**  
2003年受賞 (第16回)  
**阪本真理子・日本100マイルクラブ**  
1947年生まれ。41歳から走り始め、国内外のウルトラマソンを数々走破。フルマソンは、'94年のボストンで100回を達成した。同年、「日本100マイルクラブ」を設立し、100km以上の超長距離を中心に、ウルトラマラニックを年間20大会ほど主催。

**大阪**  
2006年受賞 (第19回)  
**大阪府富田林養護学校・富養走友会**  
「生きることに感謝し、走れることを最大限に活かしていこう」と知的障害を持つ養護学校の生徒らが結成。国体に出場する実力派メンバーもいるが、会の目標は高等部3年の間にフルマソンを5時間以内で完走すること。マラソンを走った自信が将来につながっていくという。

## 沖縄・台湾

2016年受賞

(第29回)



## 平田久雄・陳 傳男

台湾とのスポーツや文化交流に携わっていた平田さんと、台湾のランニングクラブ代表だった陳さんが、沖縄と台湾のマラソン交流を続け13年（受賞年時点）。お互いの国の大会に150人規模のツアーで参加したり、新規大会を企画するなど、友好の輪を広げている。

## 全国組織

1988年受賞

(第1回)



## 日本体力医学会持久走大会同好会

年1回、国体開催地で体力医学会総会を開催し、研究発表と共に、学会の最終日には5000m走を実施。会員自らが被験者となってデータを取得するこの持久走大会は、1973年の千葉大会（学会大会長・石河利寛氏）から行われ、日本体力医学会大会の恒例行事となった。

## 全国組織

1995年受賞

(第8回)



## 日本医師ジョギング連盟

1983年、第1回全国医師ジョギング大会を機に、走るドクターを集めて発足。医師自らが運動を実践し各種イベントを開催することで、健康のために生涯スポーツが必要であると説き、日常的な持久運動習慣の意識拡大を図っている。日本各地のマラソン大会で赤十字ゼッケンをつけてレースに参加し、無理をしない設定のペースメーカーを担いながら、ランナーに健康ランニングを呼びかけるなど様々な活動を長年継続。近年では東京マラソンをきっかけに、一般の人々にもその存在が広く認知されるようになった。走りながら医療支援を行う「ランニングドクター」の育成にも力を注ぎ、2012年4月より認定制度を開始。



## 全国組織

2014年受賞

(第27回)



## 日本糖尿病協会マラソンチーム (TDJ)

「ランニングを通じて自己管理を行い、糖尿病と向き合いながら生活の質を高める、またその支援」を目的として2007年に設立。メンバーは患者、家族、医師、医療関係者らで構成され、ホノルルマラソンやタートルマラソンなどの大会出場と練習会を中心に活動する。

## ハワイ

1995年受賞

(第8回)



## ホノルルマラソン

1973年、心臓病患者のリハビリと予防の目的で、心臓外科医のスクャブ博士らによって第1回大会開催。時間制限がなくゆったりとした気分で走れること、運営ボランティアのサービスがアロハ精神に溢れた温かいものであること、速い人だけでなく、タイムにかかわらず平等に完走者が称えられることなどが人気を呼び、テレビ放映されるようになると日本人参加者が急増。'95年には、参加者総数約3万人のうち3分の2を日本人が占めるまでになった。

## 熊本

2009年受賞

(第22回)



## 永谷誠一

趣味の登山のため、38歳の時に走り始めた。所属する熊本走ろう会で1973年、日本初の健康マラソンの全国大会「天草パールラインマラソン」を開催。好奇心、冒険心が人一倍あり、'81年には、日本人として初めてアイアンマン・ハワイ（トライアスロン）に出場。

## 熊本

2014年受賞

(第27回)



## 阿南重継

天草パールラインマラソンに第1回から42回連続出場。熊本走ろう会（第1回ランナーズ賞受賞）の役員を務めるほか、農協や森林組合の理事、阿蘇市の老人クラブ連合会長などを歴任。地域活性化に尽力した。76歳で阿蘇カルデラスーパーマラソン（50km）を最高齢で完走。

## 宮崎

1999年受賞

(第12回)



## ゴールデンゲームズinのべおか

1990年、旭化成陸上競技場の改修記念として、陸上部の宗茂監督、宗猛副監督らが長距離記録会を開催したことが始まり。陸上競技を地元で広めたいという主旨により入場料は無料。トラックぎわの位置からレースを観戦できるなど随所に工夫を凝らした。2000人だった観客数は5年後に1万人を超え、'99年には3万5000人を集める大会に成長。2025年現在も継続している。

## 宮崎

2013年受賞

(第26回)



## 谷口善昭

県内の皆伐跡地（ハゲ山）に200万本を植栽した林業従事者。山仕事に役立てたいと50歳からフルマラソンにチャレンジし、週3日河川敷を走り、週3日は山で鍛えるという練習スタイルを続けた。81歳（受賞年時点）までに75回完走。自己ベストは3時間2分12秒。

## 沖縄

1997年受賞

(第10回)



## 比嘉貞男

1917年生まれ。'53年に現在の沖縄市で体育協会を創設し、陸上の選手・監督として体育振興に貢献。'75年「コザ走ろう会」を発足させ、ジョギングおよび健康指導者として県内各地で活躍する。'81年、文部大臣賞受賞。'93年、沖縄県ランナーズクラブ連合会長に就任。

## 沖縄

2007年受賞

(第20回)



## 島袋 勉

2001年に列車事故で両膝下を失うも、「自分にとって最も難しいこと」にチャレンジしようと、リハビリを経て2004年11月に3kmのレースに参加。翌12月にホノルルマラソンにも出場する。現在もマラソン出走を続けると同時に、講演活動で全国を飛び回っている。

## 沖縄

2010年受賞

(第23回)



## 比嘉良雄

県を代表する経済人であり、沖縄市民ランニング界の中心的存在。第2回NAHAマラソン完走の翌年、32人を率いてニューヨークシティマラソンに参加、「沖縄地球を走る会」や「沖縄県ランナーズ連合会」結成につなげた。連合会では運営資金の捻出に奔走し、グラウンドや公園の整備を自治体に掛け合うなど精力的に活動。さくら前線を追う沖縄から北海道までのリレー「日本列島さくら駅伝」も企画。



## 佐賀

2009年受賞

(第22回)



## 佐藤喜八・佐藤十四子

鳥栖市で農業を営む喜八さんが54歳で走り始め、レースで応援していた十四子さんも63歳からランナーに。以来20年以上を夫婦ランナーとして過ごし、80歳を超えてからも共にフルマラソンに出場。ランニングを続け、健康に年齢を重ねていく素晴らしさを実現している。

## 佐賀

1996年受賞

(第9回)



## 中富正義

1905年生まれ。久光製菓株式会社会長（受賞年時）。ホノルルマラソンに15回連続参加し、84歳からは毎年、最高齢ランナーとなる。サロンパスを詰めた袋を持ち、配りながら走る姿が大会名物に。'91年には、最高齢での10回連続完走を祝い主催者から賞が贈られた。

## 佐賀

1997年受賞

(第10回)



## 柳川春己および伴走者

1956年生まれ。小児縁内障のため7歳で視力を失う。'92年バルセロナ・パラリンピックに出場、市民ランナーの飯盛清彦さんの伴走でマラソン全盲の部6位。'96年アトランタ・パラリンピックでは安田享平さんの伴走により2時間50分56秒で日本記録を更新、金メダルを獲得。日頃の練習では小学校教諭の船津静哉さんと佐賀大学助教授の佐藤三郎さんが、柳川さんのランニングを支えた。

## 熊本

1988年受賞

(第1回)



## 熊本走ろう会

1972年1月発足。「ジョギング」という言葉がなかった当時、医師の加地正隆氏、堤貞一郎氏が中心となり、中高年の健康増進のため「健康マラソン」を提唱。熊本県出身で「日本マラソンの父」と称される金栗四三氏を名誉会長に招き、「医者が医者いらずの健康な世の中をつくらうというのがいい」と、会の趣旨に大いに賛同される。'73年開催「天草パールラインマラソン」は加地会長の「運いあなたが主役です」の名キャッチフレーズが老壮年の共感を呼び、全国の健康マラソン大会の手本に。その後、国内で広がっていく「走ろう会」活動の中核的役割を担うようになり、走ることと健康を結びつけた市民ランニングの普及に大きく貢献した。

## 熊本

1998年受賞

(第11回)



## 八代走ろう会

1975年、初代会長の尊田倅市さんが仲間を誘い発足。走り終わった後の温泉を合わせた「日奈久温泉マラソン」を行政の支援なしで開催。八代市内に43カ所のランニングコース設定など、「大往生のその日まで」を合言葉に、ランニングの普及、健康増進に尽力した。

## 後記

大池篤：改めて受賞者の横顔を拝見し、これらの方々がまさに市民ランニングの歴史そのものだと感じました。次回以降、新たな歴史を紡ぐ皆さんの登場を楽しみます。

金井永里子：財津さん、波多野のおばあちゃん、熊本走ろう会の加地先生……社会にでたばかりのベベを温かい目で見てくださった恩人のお名前に、胸が熱くなる思いです。長い歳月を経て、改めて感謝。

大保幸子：ランナーズ賞のお手伝いに携わらせていただくたび、受賞者の方々の活動や想い、スピーチに感動し、ときに涙しながら壇上でお姿を拝見させていただいています。

松田沙友里：歴代受賞者のエピソードやお言葉は、日々の生活に前向きなパワーを与えてくれるものばかり。手元に置いて都度読み返し、自身のトレーニングや仕事の活力にしています！

デザイナー / 高野千種：創刊号表紙は皇居のランナーです。私も頻りに皇居ランを楽しんでいます。一周5km、信号なしのコースは走りやすく、たくさんの方々がいてモチベーションも上がります。



公益財団法人ランナーズ財団

会長  
橋本治朗

理事長  
野平 修（公益財団法人ランナーズ財団 常勤理事）

理事  
増田明美（スポーツジャーナリスト）  
福田六花（医学博士、ミュージシャン）  
安達知希（株式会社電通）

## 評議員

前河洋一（新潟食料農業大学 教授・陸上競技部 監督）  
喜吉 憲（キョシアンドパートナーズ株式会社 取締役）  
小川孔輔（法政大学 名誉教授）  
築留康夫（弁護士・西村あさひ法律事務所）

## 監事

中田昭弘（公認会計士）

## 名誉理事長

下条由紀子（初代月刊ランナーズ編集長）

2025年4月14日発行

発行者 公益財団法人ランナーズ財団 〒106-0032 東京都港区六本木6-15-1 けやき坂テラス

印刷所 西川印刷株式会社

© RUNNERS FOUNDATION. All Rights Reserved.